

一首目題詠「立」題詠作品の発表順に掲載

伊藤 一彦選

取立てて語るほどなき過ぎ来しを時には語りてみだし萩咲く
残像とは恐ろしきもの消してあるテレビが映す津波の映像
夕映えの空が青ざめゆくやうな国の終りを思ふ夕ぐれ

高野 智子
桑野 智章
太江田妙子

大島 史洋選

大波をかぶりて消えしわが娘引きゆく波間にぬつと立ちたり
豆腐屋のあとに建ちたる八百屋あり野菜買ふとき豆腐屋おもふ
就職のよるこび瞬時に消え失せぬ会社丸ごと呑みし津波に

浦本 洋子
保莉 澄子
池田 邦子

俵 万智選

黙禱を捧げる首相の両側に祈ることなくSPは立つ
心配を三センチずつ剥ぎ取りてブルドーザーが校庭歩む
なかなかに便りよこさぬ子に向けて疑似餌のごときメールを送る

安永 博美
齊藤 宏壽
吉岡 優子

永田 和宏選

黙禱を捧げる首相の両側に祈ることなくSPは立つ
起き伏しはまばたきのごと震災後あなたが帰る日までが一日
七百キロの百畳風は浮力得て地球をはみ出る五十秒間

安永 博美
佐々木千絵子
後藤 正樹

小池 光選

下校時の立ち当番の吾に孫は「こんにちは」を言ふ五年生として
炭俵積んでは鉄索あやつりしこの山かみに少女となりき
職歴に「三人育児十五年」と記せしひとをパートに雇ふ

富家 新子
岩崎 久香
日高 尚子

来嶋 靖生選

連れ立ちて春の街行く母と娘は輪切りレモンのような明るさ
小の字に寝てゐる嫁と二人の児二画三画しばしば動く
あさがおが夏をのぼってゆくように生きたし空にとどかなくても

針谷まさお
坂東 尚子
木内 照代

岡井 隆選

兵に呼ばれることもなき世に棲みなれてひとりの敵をこころに立たす
カダフィの顔に数多の靴の跡九十の母はテレビを撫でおり
悲しみのように裂けてるザクロの実つたえきれない私があった

東 洋
石井久美子
松浦加寿子

尾崎左永子選

クローゼットの透明傘はただ一度濡れし記憶を秘め立ちつくす
ゼブラゾーンを夏と秋とがすれ違ふ誰もうしろをふり返らずに
ゆっくりと地球がくずれてゆく予感眠れぬしじま蟬が鳴きたり

森田小夜子
鹿島 芳子
古市セツ子

穂村 弘選

落とされしコンビニおにぎり駅前のタクシーのりばにまっすぐに立つ
徘徊ではないと家族にメモ残し夜の海辺で待つ流れ星
転がった葉を二人で探しおりもうすぐですねエメラルド婚

山下 和代
村上 英明
山野 末子

小島ゆかり選

「遺体あり」と赤い布つき竹棒を立てつつ進むとにかく進む
徘徊ではないと家族にメモ残し夜の海辺で待つ流れ星
指をもて叔父は叔母の掌に「あほ」と書きかすかに笑ひそして逝きたり

松本 恵子
村上 英明
大矢 穂子

栗木 京子 選

畦に立ち稲穂の重みたしかめし百歳のばが刈つてよしといふ 宮本加代子
少年が小遣ひためて買ひし本津波に失せたり九十冊目に 小野 一男
徘徊ではないと家族にメモ残し夜の海辺で待つ流れ星 村上 英明

佐佐木幸綱 選

大切を倒立しつつ告げる子に寝転びてきく父なるわれも 松井 恵
一時の帰宅許され遺影にと妻と旅せし写真持ち来る 愛沢 崇
郭公の鳴く声ひびく空っぽの村のむこうに原発はあり 清水 節子

三枝 昂之 選

何事もなかったようにつと立ちてフィギュア選手は旋風つむじに戻る 山田 正明
わたくしを薄めるために一杯の水を飲みほし会社に向かふ 榎本 麻央
ファミレスにひとり食みを過ぎし日の家族の会話を背に聞きながら 桑原 慎子

篠 弘 選

何事もなかったようにつと立ちてフィギュア選手は旋風つむじに戻る 山田 正明
マチユピチュの古代都市とも四階の天空菜園に小松菜を蒔く 鈴木 美幸
朝光かけが斜めに延びるキッチンに「牛乳注ぐ女」となり居る 山口 明美

佐伯 裕子 選

かすかなる音に倒るる白紙の力士をあかず立たす少年 山本 初枝
打ち込まれし釘さへいつかは呑みこみて伸びてゆくらし樹木といふは 宮崎 稔子
冷蔵庫に宇宙人がいる うちの子が言うならそれは本当だろう 川又 和志

島田 修三 選

酒たばこ手あたりしだいの不摂生 斯くして立川談志でござる 勝田 洋子
ほたたと牡丹雪ふる来る・こよと来ぬひとを待つささらぎの街 松尾 タイ
マンハッタンに似合わぬ日傘を差すおみな二人見かけて夏は来にけり タンバー悦子

花山多佳子 選

あわれは宇宙のどこに降り立ちし防護服着てさまよひ歩く 伏見 範子
目の前は海であるのにカーナビは迷うことなくゆけと指示する 山田 洋子
コンビニにぼくの居場所をさがす夜浪江にとどまる君に逢いたい 檜垣 実生

坂井 修一 選

若き日は立方体の我なるにいつか歪いびつな球体となる 渡井 明子
白き腹みせて動かぬかなへびは知らないだろうみずからの死を 中川 陽子
人間に教へたきこと無きやうにオランウータン虚空を見つむ 岡本 盛